

平成21年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

絶滅が危惧されるギバチ

日本の淡水魚の中にはヒゲを持つものがあります。コイやドジョウ、そしてタナゴやモロコの仲間の中にもヒゲを持ったものがあります。しかし、その中で最も代表的な魚と言えば何と言ってもナマズとギギの仲間でしょう。

ナマズやギギの仲間はヒゲが長く、猫の様なので英語で「キャットフィッシュ」と呼ばれています。どちらもヒゲを持つことから見た目には良く似ていますが、その違いは、ナマズの成魚には4本のヒゲがあるのに対し、ギギの仲間は長短4対8本のヒゲがあります。また、ギギの仲間には、サケやアユと同じ様な第2背ビレにあたる脂ビレがあります。しかし、ナマズには脂ビレがありませんので、分類学上、ギギ科の魚とは大きな違いがあります。



ギバチはギギ科の魚で、青梅周辺では、ギンタ、ギンタバチ、ギンギョなどと呼ぶ人もいます。日本固有種の魚で、主に東北、関東地方に分布、生息しています。近縁種のギギは、本州中部以西に分布し、同じ川にギギとギバチは同居しません。

ギバチの大きさは最大で25cmくらいになり、雄の方が雌よりも大きくなります。体色は茶褐色ないし黒褐色ですが、稚魚期は黒色、未成魚は金色をおびた茶色で、濃淡があります。ギバチの尾ビレは後縁が単に浅く湾入するだけの形をしています。ギギの尾ビレはコイと同じ様に2又した形をしています。顔つきは、ギバチはギギに比べて丸みがあります。

ギギ科の魚は、体をつかむと胸ビレと基底部の骨をすり合わせて「ギュッギュッ」と音を出します。「ギギ」と呼ばれるのは、それに由来しているものと思われています。また、背ビレと胸ビレには棘^{とげ}が有り、刺されると激痛を起こします。ギギ科のアカザにも棘^{とげ}があり「サソリ」と呼ぶ地方があります。ギバチの「バチ」は「蜂」ではないかと私は想像し

「ギギバチ」「ギンタバチ」を略して「ギバチ」になったのではないかと考えますが、如何でしょうか？

ギバチは、清澄で自然の多く残された河川の中流域に生息します。緩やかな流れの軽石の隙間や沈木の陰などに昼間は潜んでいて、陽が暮れると川の流れの緩やかな岸寄りを、エサを求めて活発に泳ぎまわります。主に水生昆虫を捕食し、小魚や甲殻類なども食べます。水槽飼育で観察してみますと、とても臆病で物陰を好みますが、エサに対しては、とても活発に摂餌^{せつじ}します。口に入れたエサは咬^かまずに飲み込みます。底石や沈木の周りを、横泳ぎや逆さ泳ぎなどしながらエサを捜し、水底に口ヒゲを擦り付けながら泳ぎ、エサに触れると俊敏に反応します。また、自分の巣穴に近寄って来た魚には、咬みついて追い払う習性があります。産卵期は6～7月で石の下側などに直径2 mmほどの黄色い卵を産みつけます。

現在は、ギバチを漁獲して食する機会はほとんどありませんが、昔は沢山獲れたそうです、その様な地域では、煮魚や天ぷらにして食べた様で、とても美味しい魚だそうです。

表の写真のギバチは平成20年9月に多摩川の河辺にて採捕したのですが、東京都内では絶滅の危機に瀕している魚の1つになっています。水質汚染や河川改修による環境変化に大変弱く、日本中の多くの分布域で著しく減少しています。護岸工事などにより、自然が失われ、棲み家である石の隙間が砂や泥で埋まってしまい、簡単に数を減らしてしまうため、環境指標種として東京都でも注視しています。

青梅市内の河川でも、なかなかギバチを見かけることはありません。河川環境が改善されて、玉石がゴロゴロ沢山有る河川になって、かつての様にギバチが安心して棲める様になることを切に願います。

(注) もしギバチを見つけても無闇に掴まないで下さい。刺されます。刺されると、アシナガバチに刺されたのと同じくらい痛みますので御注意下さい。

(文責 大久保 芳木)